

Title	指標詞「私」と世界内の人物
Author(s)	木村, 健
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2003, 37, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11058">https://hdl.handle.net/11094/11058</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 指標詞「私」と世界内の人物

木村 健

ここで扱うのは、語「私」は何らかの対象を指示するのか否か、また、もし指示するとすればそれはどのような対象なのかという問題である。<sup>1)</sup>

語「TK」を人物・木村健を一意的に指示する名や（指示詞・指標詞を含まない）記述と約定し、私の述べる次の文を考える。

(1) 私はTKである。

ありふれた見方をすれば、語「私」の指示対象は、小説を朗読したり他の人の言葉を直接話法で引用するような場合を除いて、語「私」の使用者自身、すなわちTKということになるだろう。そこで先の問題を、言明(1)はどのような種類の言明なのかという問題に置き換えて考えてみる。内容を度外視し、文(1)を「AはBである」という形式を持つ命題一般という観点から捉えると、言明(1)は次のような種類の言明であり得る。

①語「私」は指示表現ではなく、例えば、非人称の形式的主語のようなものである。言明(1)は同一性言明ではない。

②語「私」は指示表現である。

(a)語「私」の指示対象はTKである。言明(1)は同一性言明であり、一つの対象を指示する二つの語の言語的規則（互換性）を表す。

(b)語「私」の指示対象はTKではない。言明(1)は同一性言明ではなく、二つの語が指示する二つの対象の関係（所有・帰属）を表す。

以下、立論と反論を繰り返して可能な議論を出し尽くすことを心掛けるが、考察のおおまかな流れは、先の「ありふれた見方」にあたる②(a)は採

用出来ないという見解に向かっている。1.では二つの名や記述の間に成立する同一性言明と言明(1)との違いを考察する。2.では語「私」の指標詞としての特徴を捉え、指示の仕組みを考察する。3.では言語を公共的・規範的なものと位置づけ、語「私」の習得や使用のための一つの前提となる語「私」の指示対象に関する使用者の知識を考察する。

### 1. 同一指示語の認識的価値の違い

私とTKの同一性が疑われる一つの要因に、語「私」と「TK」の認識的価値の違いが挙げられる。しかし、認識的価値の異なる二つの語が実は同じ対象を指示しているということがあり得る(こうした語は同一指示語 Co-referring terms、あるいは同一指示表現 Co-referring expressions と呼ばれる)。まずは、私の述べる次の形式の文で検討する(ただし、「 $\phi$ である」は任意の述語とする)。

(2) 私は、私は $\phi$ である、と知っている。

(3) 私は、TKは $\phi$ である、と知っている。

例えば、「 $\phi$ である」に「背中に傷を負っている」を入れてみると、言明(2)は言明(3)を含意しない。何故なら、私が自らの背中に痛みを感じていれば言明(2)は真となるが、私が職場の仲間から陰でTK(例えば、福音書の男)と呼ばれていると知らず、さらに「TKは背中に傷を負っている」と伝え聞いたりしていなければ言明(3)は偽となるからである。同様に、言明(3)も言明(2)を含意しない。何故なら、私がTK(例えば、モニター画面に映った男)のシャツの背中に血糊を見つけていれば言明(3)は真となるが、私とその男は私であると気づいておらず、さらに何らかの具合で背中に痛みを感じていなければ言明(2)は偽となるからである。このように言明(2)と(3)で真理値が異なる状況を想定出来ることが、二つの語の認識的な価値の違いを示している。

だが、このことから直ちに私と TK は同一ではないということにはならない。何故なら、或る名や記述が志向的文脈にあるとき、すなわち「信じている」・「知っている」・「考えている」などの動詞の目的節の内部にあるとき、元の名や記述を同じ対象を指示する他の名や記述に置き換えれば、文全体の真偽が変わる場合があるからだ。それならば語「私」も「TK」も同一の対象を指示しているのではないか。そして、言明(2)と(3)が真偽を異にする場合とは、単に私が私と TK の同一性を知らない場合に過ぎないのではないか。

語「a」と「b」を二つの任意の名または記述からなる同一指示語の対とする。例えば、「宵の明星」と「明けの明星」、「熱」と「分子の平均運動エネルギー」、「水」と「 $H_2O$ 」などの対がこれにあたる。a と b の同一性言明とは、二つの対象の間を関係を述べたものではない。むしろ、この言明は、一つの対象に関して何事かを述べる際に、対象を指示する語「a」と「b」が完全に置き換え可能であるという言語的規則を述べている。すなわち、「a は  $\phi$  である」が真(偽)であるのは、「b は  $\phi$  である」が真(偽)であるとき、かつそのときに限る、という規則である。ただし、a と b の同一性を知らない人にとって対象は二つ存在するのであり、この人が同一性を知る過程では、まず二つの対象間の同質性が注目される。a と b があらゆる点で同質であると知られたとき、a と b の同一性が確認され、この人にとって対象は一つとなる。いわば彼にとって「何が存在するか」が変化するのである。こうした過程は、種々の制約を受けた個人的・臆見的な視点を脱して、より客観的な視点へと至ることと捉えることが出来るだろう。

言明(1)が同一性言明ではないこと、すなわち語「私」と「TK」の認識的価値の違いが二つの同一指示語の認識的価値の違いに還元されないことを示すためには、反例が必要である。すなわち、本来ならば、語「私」と

「TK」が志向的文脈にないときに、二つの語の置き換えに支障が出る例を見つけないければならない。ここで、私が述べる次の文を考える。

(4) 私は存在する。

(5) TK は存在する。

まず、言明(5)は真偽を持つのに対し、言明(4)の否定は矛盾を含む。故に、一対をなすこの文は、語「私」と「TK」の置換に支障をきたす例とみなすことが出来る。逆に、この矛盾は単に語「私」の使用に関わる特性に由来するもので、反例にはあたらないとみることも出来る。言明(4)の否定が矛盾を含むことは、2.で語「私」の指示の失敗の無さと関連して再び取り上げることにし、この論点は保留しておく。

ここで問題にしたいことは、単純に肯定言明を考えたときに生じる。TKが存在すること、そして、彼が一人称言明を正しく述べる言語能力を持つことは客観的に検証可能である。このとき、語「私」と「TK」の置換により言明(4)を(5)に、(5)を(4)に言い換えたとしても述べられる言明の内容は同じであると思われるかも知れない。

TKを客観的な観点から詳細に調査して発見出来るのは、物理・化学・生理学的事実などである。だが、こうした客観的事実としてTKが存在することは、私が主観的に捉えた私の存在／非存在の択一を支えていないようにみえる。また、私達は、客観的事実の違いに基づき、各々の人間個体を数ある中の一つとして区別する。だが、私が主観的に捉える「私が存在する」という事実は、決して数ある中の一つと位置づけられるものではない。「私が存在する」という事実が、数ある中の単なる一例に過ぎないと感じられるのは、その時点で既に客観的観点に立っているからである。このように、客観的に捉えられたTKの存在と個体化の原理は、私が主観的に捉えた私の存在と個体化の原理とは異なっている。故に、たとえTKが客観的には存在したとしても、私の主観的な観点からは「何故、私も存在しな

ければならないのか」、「何故、TKが私でなければならないのか」と問うことが出来る。さらに、こうした疑問は、より客観的な視点へと至った時に解消する無知に由来するものとも考えられない。実際、言い方としては先にみた言明(4)の否定の矛盾に関わるが、TKが客観的に存在するにもかかわらず、私の主観的な観点からみて端的に「私が存在しない」可能性は容易に想像可能である(もちろん、このときもTKは文(4)を述べるのではあるが)。

前段落の議論が認められるならば、主観的観点からみた内容の違いのため言明(5)から(4)への置き換えに支障が生じる。否むしろ、このことはそもそも文(4)を志向的文脈から独立に取り出すことが出来ないことを示している。そして、語「私」と「TK」が志向的文脈の外で互換可能であると示せないことは、言明(1)が同一性言明ではないことを示す根拠とみることも出来る。また、語「私」はこうした議論を可能にする独特の指示の仕組みを持つのかも知れない。逆に、前段落の議論は、語「私」を志向的文脈の内部で扱っているために可能になっているのに過ぎないとみることも出来る。すなわち、もし語「私」が指示対象の指定に関して一定の客観的規則を持つならば、語「私」は他の語に置き換えるなどして志向的文脈から独立に取り出せるのであり、前段落の議論は語「私」の指示の仕組みに関する誤解に基づいているのだと結論出来るだろう。後者の見解を退けるため、次節では、指示の仕組みに関し、指示詞・指標詞の特色、とりわけ語「私」にのみ際立つ特色を抽出する。

## 2. 指示詞・指標詞と世界内の対象

指示表現と呼ばれるもののなかで、確定記述や固有名は誰がいつどこで使用しようとも一意的に指示対象が決まるのに対し、指示詞や指標詞は使用される文脈に依存的・感応的である。また、後者に属する語にも、文脈

への依存・感応の仕方に差がある。例えば、「そこ／あそこ」、「これ／それ／あれ」などの指示詞は、使用者の意図に基づく指差しなど直示行為により指示対象が指定される。これに対し「私」、「あなた」、「今」、「ここ」、「昨日」、「今日」、「明日」などの指標詞は、直示行為を必要とせず、一定の規則に従い、使用される文脈に応じて関連項が指定されるといわれる。さらに、「私」以外の指示詞・指標詞では、時間が経過した後に或る言明を述べ直す際に、言明内に含まれた指示詞・指標詞を他の表現に置き換える必要が生じる（例えば、「これ」→「時刻  $t$  に机の上にあった本」、「今日」→「昨日」）。これに対し、語「私」の場合、言明の時制を修正しさえすれば、語自体の置き換えは不要である（例えば、「私は走る」→「私は走った」）。このような時間経過に伴う置き換えの不要さは、むしろ固有名や確定記述の特徴と共通するものである。

一般に、指示詞・指標詞には、使用の際に指示しようとする対象に関する記述的内容を使用者本人が予め持っている必要がないという特徴があるといわれる。例えば、私は、たとえ記憶を失い自分が誰なのか分からなくなっても言語能力さえ失っていなければ、「私は誰か」という疑問を口にすることが出来る。同様に、具体的な事物・場所・時刻の情報を欠いた状態でも「これは何か」・「ここはどこか」・「今はいつか」という疑問を呈することが出来ることも同じ特徴に基づいている。この特徴から、使用者本人にとって指示詞・指標詞の指示対象とは、客観的世界内の事物のように記述出来る対象とは異なり、使用者本人の曰く言いたい私秘的な対象であると考えたくなるかもしれない。

だが、各々の指示詞・指標詞が指示出来る対象は限定されているので、例えば、場所の指示詞によって時刻を指示することは難しい。従って、或る一つの指示詞・指標詞を選択して用いる時点で、使用者は、自分が指示しようとする対象がどのような種類の対象なのかという最低限の知識を持

っていないなければならないことになる。こうした論点は、日本語の一人称表現の多様さを根拠にさらに強化出来る。日本語は、これまで扱ってきた語「私」の他に、一人称単数を表す語として「僕」・「俺」・「我」・「アタシ」など種々の表現を持っている。この多様さは、潜在的・顕在的な受け手（聴者や読者）である他の成員との人間的・社会的関係の多様さを反映している。他の成員とは世界内の人物であり、関係とは人物間の関係に他ならない。数ある一人称単数語の内から或る語を選択する時点で、使用者は、その語の指示対象について、それが世界内でどのような相対的位置や格付けを持つ人物であるのかを既に了解していることになる。

確かに、或る一つの指示詞・指標詞を使用する時点で要求される知識は最低限のものであり、対象を同定するためには不十分な記述に過ぎないかもしれない。しかし、こうした記述も、制約を受けた個人的・臆見的な視点を脱して、より客観的な視点へと至ることにより、事実としては、固有名や確定記述で示される客観的世界内の何らかの対象を指示していることが分かるのではないか。

例えば、私が語「私」を用いる際に有する最低限の知識に相当する記述を「tk」と約定する。このとき、「tk」と「TK」は同一指示語であり、言明(2)と(3)に真偽の差をつくり出していた語「私」と「TK」の認識的価値の違いは、語「tk」と「TK」の認識的価値の違いであったといえるだろう。また、先の記憶喪失の想定で、私はtkとTKの同一性を忘れていたのであり、記憶を取り戻すこととは私がtkとTKの同一性を思い出すことに他ならない。しかし、このことから、私が私はtkと同一であると考えていることにはならないし、ましてや私がtkと同一であることにもならない。何故ならば、私が述べる

(6) 私はtkである。

が、言明(1)と同様に同一性言明ではないと考えることが出来るからであ

る。このことは、例えば、もし私が鯨は哺乳類であると知っていなければならなかったとしても、そこから鯨は哺乳類と同一であるという結論を引き出せないことを考えれば、容易に理解出来るだろう。

では、語「私」以外の指示詞・指標詞の場合にも、これらの語を使用する際に最低限必要な知識を表す記述の指示対象と、当の指示詞・指標詞自体の指示対象との間に同一性は成立しないのだろうか。同じく、こうした記述と同一指示語の関係にある固有名や確定記述の指示対象と、当の指示詞・指標詞自体の指示対象との間に同一性は成立しないのだろうか。

確かに、指示詞・指標詞と固有名・確定記述の間には認識的価値に違いがある。しかし、この違いは、指示対象の違いではなく、指示のための道具の違いに過ぎないとも考えることも出来る。例えば、固有名「火星」で指示する場合と指示詞「あれ」で指示する場合とで、指示対象が異なるようには思えない。確かに、語「あれ」は文脈依存的なので、指示対象の特定には使用される位置・方向・時間・周囲の状況などが勘案されなければならない。しかし、こうした文脈の勘案は、客観的な観点から行うことが可能である。また、指示詞「あれ」は同一文脈においても指示対象の候補を無限に持つので、使用者の意図によって指示対象が一つに特定されなければならない。しかし、使用者の意図といえども当人にのみ知られる私秘的なものではなく、語「あれ」を使用する人物の客観的に観察可能な振る舞いとして表れ得る。何故ならば、意図が上手く聴者に伝わらない場合、話者は、聴者に向けて他の行為を補足しなければならないからである。

また、指示表現として指示詞・指標詞と固有名・確定記述のどちらを選ぶか（選ぶ準備があるか）によって、志向的態度自体も変化するとみることが出来る。<sup>2)</sup> 志向的態度の一例として「知っている」を取り上げ、私の述べる次のような文を考えてみよう。

(7) 私は、火星は大接近中である、と知っている。

(8) 私は、あれは大接近中である、と知っている。

例えば、私が天文雑誌を拾い読みして知識を得ていたとすれば、言明(7)は真である。このとき、私が全くの星空音痴でどこにどの星が輝いているのかわらなければ、私は文(8)を述べる事が出来ないし、特に何の行動もしない。他方、私が実際の夜空でどれが火星なのかを知っている場合、私は文(8)を述べる事が出来るし、望遠鏡を屋外に出して観察を始めるかもしれない。文(7)においても文(8)においても、知っていると言われる内容自体は同じである。しかし、指示詞「あれ」を用いる(用いる準備がある)かどうかで、以降に続く私の行為に違いが出る。すなわち、同じように「知っている」と表記されてはいるが、指示詞「あれ」を用いる(用いる準備がある)かどうかで志向的態度自体が異なるのである。

TKが使用する指示詞・指標詞の指示対象を特定する規則は、客観的に十分に把握可能であるように思える。このように考えると、TKが指標詞「私」を使用する(使用する準備がある)ことは、他の指示詞・指標詞と同様、世界内の対象に対して或る種の志向的態度をとることであり、たまたま対象がTK本人である場合ということになる。問題は、指標詞「私」の指示の仕組みを他の指示詞・指標詞と同じ枠組みで捉えることが出来るかどうかである。このことを、語「私」の指示の仕組みの特殊性として、指示の失敗の無さと関連させて考察する。語「私」の使用者は、次の二つの点で指示の失敗を免れているといわれる。①対象の候補の複数性に由来する指示の失敗。②対象の不在に由来する指示の失敗。

①については、直示的に対象を特定する仕組みを持つ指示詞・指標詞一般に共通する特徴といえる。他の指示表現、例えば、名や記述では、正しく用いられたとしても、指示することを意図された対象以外にも、名や記述に該当する対象の候補が存在し得る。このために使用者は、感覚器官による知覚認識は正常でも同定・再同定の判断のレベルで誤りを侵す可能性

がある。確かに、指示詞の場合、話者の意図が伝わらず、聴者が対象を把握し損ねることはある。しかし、指示詞・指標詞の場合、正しく使用されれば、語の使用者にとって指示対象は高々一つしか存在しない。

ここでは②が重要である。語「私」以外の全ての指示表現には、文中の先行詞を指示する場合などを除き、いかに正しく用いられようと、対象が不在である可能性がある。つまり、夢・幻・見間違えなど、感覚器官による知覚認識のレベルに誤りが起きる可能性である。これに対し、語「私」はこの種の指示の失敗を免れている。この失敗に対する免疫性は、聴者の側から、「私」と発話している者が存在しないのは矛盾であるという語用論的な根拠で説明される場合がある。しかし、もし語「私」の指示が使用者の感覚器官の知覚認識に基づいて行われているとすれば、他の指示詞・指標詞と同じくこの種の誤りを侵す可能性を排除出来ない。

もし語「私」の使用者にこの語の指示対象が把握されているとすれば、それは、他の指示詞・指標詞とは異なり、感覚器官による知覚認識とは別の仕方によると考えざるを得ない。逆に、語「私」を他の指示詞・指標詞と同じ枠組みで捉える限り、指標詞「私」の指示の仕組みの特殊性を浮かび上がらせることは出来ない。また、そうした特殊な仕組みで捉えられている対象は、感覚器官による知覚認識の対象のような客観的な世界内の事物ではないという可能性もある。このことは、1.の最後でみた客観的な観点とは独立した主観的・私秘的な観点と関係している。

問題は、指示の失敗を免れて私秘的な対象を指示するという営みが果して指示と呼べるのかということ、また、そうした私秘的な営みに基づいて言語活動を開始出来るのかということである。次節では、同様の問題を主語「私」への述語の帰属という点から考察する。

### 3. 言語の習得・使用と語「私」の指示対象についての知識

私達は、一人称単数の主語に対しても、人物を指示する他の人称の主語に対しても、同じように種々の述語を帰属させて文を作る。これらの述語の中には、高さ・色・形・重さなど専ら物的特性を表す語がある。また、専ら心的特性を表す述語として、思惟・感情・感覚・知覚・記憶、気質や性格などに関わる語がある。さらに、物的／心的両面の特性を表す述語として、行為や意図、居場所や身体的姿勢などに関わる語もある。ここでの物的／心的の区別は便宜的なものに過ぎないが、いずれにせよ主語「私」にのみ専属的に帰属される述語は存在しない。

他方、これらの述語の中には、一人称単数を主語にする場合と、他の人称を主語にする場合とで、その帰属のさせ方が異なるものがある。私が他の人に述語を帰属させる際、伝聞をそのまま利用する場合を除き、私は相手の身体的外観を観察することによって特性を見定めるしかない。このとき、観察の不備のために、見定められた特性が見当外れであるために間違った述語を帰属させることがある（例えば、「うれしくて踊っている」のかと思っていたら、実は「痛がっている」ことが判明する場合）。

私が同様に身体的外観の観察に基づいて自己帰属させる述語がある一方で、自己帰属させるにあたっては観察に基づかない一群の述語がある。心的傾向性を表すものを除く心的述語、行為や意図の述語、身体的姿勢の述語の一部などが、このグループに含まれる。これらのうち、志向作用を表す述語（例えば、「愛宕山を見ている」）の場合、作用の向かう対象を間違えており（例えば、「愛宕山」ではなく実は「比叡山」を見ている）、より観察の精度を上げることで訂正がなされることはあり得る。しかし、作用自体（この場合では、「見ている」ということ自体）については、観察を深めることで訂正がなされる（例えば、「見ている」のではなく「聞いている」

と分かる) ことはない。この種の訂正が無いことこそが、このグループの述語の特徴である。「観察」の概念には、観察される対象の全体は一度に現れず、異なる角度からの把握の可能性があるということが含まれる。しかし、ここで問題にしている述語を自己帰属させる場合、各述語の規準的特性は当人に一挙に全体として与えられるのである。

このように、字面の上では同じ述語でも一人称単数とその他の人称とでは帰属のさせ方・検証の仕方が違うため、語「私」と他の人称の主語とでは指示対象のタイプが異なるのだとする見方がある。その典型的な見解として、次の二つが挙げられる。①語「私」の指示対象は、世界内の物的対象ではなく、私密的・心的な対象である。②対象の指示において失敗が予め排除されているというのは「指示」の概念に反しており、そもそも語「私」は指示表現ではなく、指示対象を持たない。

これらの見方に対する反論は、主に、言語を公共的・規範的なものと捉え、その習得の観点から為され得る。<sup>3)</sup> ②の見解では、例えば、

(9) 私は背中が痛い。

といった言明を痛みに際し思わずあげてしまう叫び声に類するようなものとみなす。こうした自然な表出では、誰が叫んだかということが他の人々に知られることはあり得る。だが、このとき、叫び声をあげる当人に人物を指示する意図は無い。そこで、文(9)に含まれる語「私」は、非人称の形式主語に類するものとみなされるのである。自然な表出としての叫び声には、痛みがある／ないに対応して叫び声をあげる／あげないの区別があるだけで、正／誤や適切／不適切の区別はない。しかし、文(9)が言語表現として規範性を持つ以上、その習得過程で発話者以外の者が言明の真偽性・適切性を判定しなければならない。このとき、判定規準となるのは、文(9)を述べる人物の公共的に観察可能な特性でしかあり得ない。

また、①の見解のように、語「私」の指示対象を私密的な対象と考える

ならば、私秘的な営みとして自己帰属される述語の特性は、決して他の人の理解することの出来ないものになってしまう。私秘的な営みは、規則の如何なる解釈も許容してしまい、結局のところ、言語の持つ規範性を説明出来ない。また、私達は、種々の述語に関して、一人称単数における意味と他の人称における意味を区別している訳ではない。だとすれば、言語の習得の過程は、述語の私秘的な自己帰属を起点に始まるのではなく、既習得者と未習得者の相互のやりとりを基に進められると考えられる。人物に帰属させられる全ての述語について、これらの述語を自己帰属出来る可能性は、本人が語「私」の指示対象が他の人称の指示対象と同じ種類の対象であると知っていることに基づいていなければならない。

ここで、以上二つの反論は言語の習得段階に関してのみ妥当するのではないかという疑問を呈することが出来る。何故なら、既に言語を習得した後、ここで問題にしている幾つかの述語の自己帰属の真偽性・適切性の判断は特権的に本人に委ねられるように思われるからである。例えば、たとえ他の人がTKの身体を観察して痛みは無いと主張しても、私自身が背中が痛いと感じているならば、私が文(9)を述べることは妥当であろう。そして、さらに私とTKの独立性を確保していけば、TKは世界内に実在せず他の人には観察されないとしても(さらには、客観的世界など存在しないとしても)、私が何かを思惟しているとするれば、考えている事自体、そして考えている主体である私自体は実在すると言えるのではないか。

この議論は、観察に基づかず自己帰属される述語の典型をどのような述語にみるかに関わっている。このグループの述語の中には、確かに先の例のように、他の人が身体的外観を一瞥するだけでは本人がどんな特性を自己帰属させているか把握出来ないものがある。他方、同じグループの述語でも、身体的運動を伴う意図的行為や身体的姿勢に関わるものは、他の人の観察による把握が比較的容易なだけでなく、本人自らも状況によって

は同じ観察による把握が可能である。さらに、後者のタイプの述語では、言語習得後においても、述語帰属の真偽性・適切性の判断は観察者に委ねられる。例えば、たとえ言語を習得した者が「私は腕を回している」と言明したとしても、実際に当人の腕が回っていなければ、彼は自己帰属させている特性を判断し損なっているか、判断は正しくとも語の選択において誤っているかのどちらかなのである。難易度から考えて、述語の習得の過程は後者のタイプから前者へと進んでいくものと思われる。そして、このグループの述語が、習得過程に関していわば地続きであるならば、自己帰属の絶対的な一人称特権と思われたものは、観察に基づく訂正可能性を含んだ相対的な特権ということになる。私と TK とが独立しているように思えるのは、他の人の観察が不十分であるからに過ぎない。例えば、医学・生理学が進歩して「痛み」を完全に把握出来た暁には、「痛み」に関する一人称特権は消滅するのかも知れない。このことは、主観的観点の内部を私秘的に分節化することの不可能性を意味する。ただし、述語帰属のさせ方の二つの区別を消滅させるものではないため、主観的・客観的二つの観点はやはり残るのであるが。

さらに「～を覚えている」といった記憶の述語を自己帰属させること、そしてこうした述語に基づき過去時制の述語を自己帰属させることを考える。このとき、主観的な観点からだけでは「～を覚えている」と「～を覚えているように思えるだけで、実は過去に体験されていない」の区別は出来ない。また、「～を覚えている（実際に体験されたことが思い出されている）」という概念は「～を忘れていない（実際に体験されたことが思い出されていない）」という概念と対になって初めて有意味となる。そして、「～を忘れていない」という述語もまた主観的な観点だけからは自己帰属出来ない。従って、記憶の述語や過去時制の述語を自己帰属させるために、私は、他の人々によって述べられる TK の過去の体験についての証言を得なければ

ばならない。すなわち、私がこうした述語を自己帰属させることが出来る可能性は、私が私は今までずっと TK であったと知っていることに基づいていなければならない。

言語が公共的・規範的なものである限り、語「私」の習得や使用にあたり、私は、私は TK である・私は他の人称の指示対象と同じ種類の対象である・私は今までずっと TK である等々と知っていなければならない。これまでの議論から、これらの知識の対象となっている命題は同一性命題ではない。しかし、言語を用いる上でこうした知識を有しなければならないという条件は、私の存在の仕方を規定する。すなわち、語「私」を用いて私の存在を語る以上、何らかの身体・人物を離れた私の存在は考えられないのである。

#### 注

- 1) 同種の問題を扱った見解として、下記の論文・著書を参考にした。  
Hector-Neri Castañeda, " 'He': A Study in the Logic of Self-Consciousness", in *Ratio* 8(1966), 130-157.  
Sydney S. Shoemaker, "Self-reference and Self-awareness", in *The Journal of Philosophy*, vol. LXV no. 19(1968), 555-567.  
G. E. M. Anscomb, "The First Person", in *Mind and Language: Wolfson College Lectures* (1974), ed. Samuel Guttenplan, 45-65.  
永井均『〈私〉の存在の比類なさ』(勁草書房) 1998年
- 2) この見解については、John Perry, "The Problem of The Essential Indexical", in *Noûs* 13(1979), 3-21. を参考にした。
- 3) 立論と反論の対は、1959年のストローソンの見解を参考にした。P. F. ストローソン『個体と主語』中村秀吉訳(みすず書房) 第三章。

(大学院博士課程単位修得退学)

## SUMMARY

**The Indexical 'I' and a Person in the World**

Takeshi KIMURA

This paper deals with the following questions about the first person: (a) Is the word 'I' a referring expression? (b) If 'I' refers to something, what is its referent? Consider the statement, "I am TK", where the word 'TK' is a name or description that refers univocally to a person: Takeshi KIMURA. Such a statement is ordinarily regarded as an identity statement. But this ordinary view is misleading.

For example, if two terms 'x' and 'y' are identical, the following conclusion is reached: "x is  $\phi$ " is true (false) if and only if "y is  $\phi$ " is true (false), where 'be  $\phi$ ' is an arbitrary predicate. But even if we take into account of the fact that 'I' is an indexical depending on the context, replacements between 'I' and 'TK' do not always succeed. We can objectively verify the fact that TK exists and is an 'I'-user. But this verification does not determine the fact of my existence from my subjective viewpoint. The gap between the two viewpoints does not stem from my ignorance. Thus, the difference in cognitive values between 'I' and 'TK' isn't the same as the one between two co-referential terms.

It is said that 'I' cannot fail to refer to the object it purports to refer because the referent is absent. The other referring expressions used in *oratio recta* may do so in the event of a delusion, dream, etc. If we consider the reference of 'I' based on a sense-perception model, we can not explain this feature. Thus, self-awareness contains a private factor, independent of the objective world.

Although there is a difference in the ways of ascription, none exist in the meanings between a predicate ascribed to the first person and the same one ascribed to the second and third person. Usually, the truth or adequacy of my statement, "I am  $\phi$ " is verified by others saying, "TK is  $\phi$ ". Hence to learn a language, I must know that I am TK or, at least, that I am the same sort of entity as the other person. This condition restricts my existence.

キーワード 私 同一指示語 指標詞 観察に基づかない自己帰属